

## 子どもの視線で撮影した世界各地の「激動の時代」をアーカイブ化で世界に発信し、次世代に残す。

ワンダーアイズプロジェクトは、過去10年間、主に発展途上国の子どもたちを中心に写真のワークショップを行うとともに、彼らが撮影した写真展を現地と日本で開催してきた。どの写真も激動の今の地球を子どもの視線で見るといふ、歴史資料としても貴重な作品ばかりだ。それを後世に残し、活用するためにデジタルアーカイブ化に取り組んだ。

紛争地域であっても、子どもたちは楽しそうにカメラを周囲に向けた。

カメラマンでワンダーアイズプロジェクト代表の永武ひかるさんは、2000年に東ティモールで写真撮影のワークショップを開いた。当時の東ティモールはインドネシアからの独立紛争が一段落したところだったが、至る所に紛争の爪痕が残っていた。

それでも、子どもたちの表情は明るかった。カメラなどさわったことがない子どもたちに使い捨てのカメラを渡すと目を輝かせて、風景や友だち、家族などを撮り始めた。

作品を見た永武さんは目を見張る。

「子どもたちの感性がそのまま作品に表れます。言葉にはならない感情を写真の中に発見したときが一番うれしかったので、これは続けていく価値があると確信しました」

以来、永武さんはこの活動を毎年開催することにした。ウズベキスタン、オーストラリア・アボリジニ、ブラジル、アフリカ難民キャンプ、インド、スマトラ、アイスランド、極東ロシア、キューバなどのほか、日本の銀座や徳之島、横浜などでも開催している。

永武さんはこの活動の狙いを次のように語る。

「地球というひとつの星で多様な社会文化が共生する時代に、写真を通じて互いを知り、つながりをつくりだし、それぞれを尊重しあい、未来の希望を分かち合うこと。それを知識としてだけでなく、そういう感性を育もう、というのがプロジェクトの試みです」

言葉は通じずとも、絵は描けずとも、写真なら簡単に表現ができ思いを伝えることができる。子どもの視線で社会を見ることができる。それが写真の強みだ。

写真展に来場した日本人からは「貧しそうなのに、子どもたちも大人も明るい笑顔……。幸せについて、豊かさについて、考えさせられた」「スマトラの森の激減が日本の私たちの暮らしに無関係でないことがわかった」など、発見の多い写真展であることを物語る感想が多く寄せられている。

悲願のデジタルアーカイブ化によって、活動分野はさらに拡大。

写真の撮影には子どもたちの教育面での効果もある。レンズを通して、自分の身の回りをさまざまな角度から見直すことができるからだ。

「普段気づかなかった自然の美しさや豊かさを発見したり、小さな命の営みに驚いたりして、レイチェル・カーソ



WWFとのコラボレーション活動で、スタッフからカメラの使い方の説明を聞く子どもたち

ンが著作でふれた「神秘さや不思議さに目を見はる感性」が生まれ、自然を大切に思う感性が育つでしょう」

それは、カメラマンとしての活動を通じて永武さんが実感してきたことでもある。

一方、これらの作品は歴史的資料としても貴重なものだ。先にあげた発展途上国の「現在」を子どもたちの自然なまなざしで撮影し、日常が記録されている写真など他には存在しないからだ。だが、初期の頃の写真はレンズ付きフィルムで撮影しており、経年劣化が心配される。デジタルアーカイブ化によるデータの保存はプロジェクトの悲願だった。

「今回のAJOSCの助成を受けて、ようやくアーカイブ化することができ、ほっとしています。写真展をしても見に来られる方は限られていますが、これで地球上の多くの人に作品を見てもらえるようになり、国際的な相互理解活動に役立てることができます」

アーカイブ化によって、インターネット上で公開できる写真のデータは増えた。同プロジェクトではこれにあわせて、データを整理し、各地の基本的な情報も掲載するなど、よ

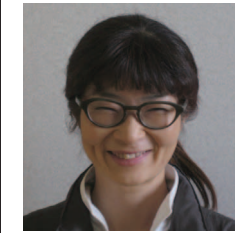


楽しそうに撮影する子どもたち



日本で行われた写真展の様子

担当者より



写真の価値を次世代へ受け渡していく基盤づくりができました。

ワンダーアイズプロジェクト  
代表  
永武ひかるさん

このたびは活動に助成いただき心から感謝しております。草の根の文化的な活動では資金作りもが難しく、しかしながらやり遂げなければならない重要な活動でした。写真の管理の責任を全うし、次世代へ価値を受け渡していく基盤作りができました。この成果を今後の活動に活かしてまいります。

り使いやすく、理解しやすいホームページに改良しようとしている。

それによって情報発信能力も拡大することから、若い協力者も募り、各地をネットでつないで継続的に撮影情報を交換するなど、今、夢がふくらんでいる。

「写真を媒介にして、世界中の人と人をつないでいく試みをもっといれていきたいですね」と永武さん。

2012年にはアジアや南米に加え、東日本大震災の被災地でもプロジェクトを展開する予定である。



デジタルアーカイブ化された写真はHP上で見られる